

概念 概念に於ける言語の媒介（承前）

——論理研究のための一つの試み——

飯倉 龜太郎

五 意味の構造 一

表象、知覚、直観と意識の二重構造
並びに、現象の領域の成立に就いて

われわれは、特殊性の媒介を完了しない概念が、實は、概念たることを止めて、單なる言葉に轉落する事態を指摘して來た。云ひ換へれば、この事は言葉から概念への轉化に依つて、其處に形成せられた意味の世界が、再び、單なる言葉に轉落することをも、意味するであらう。更に此の事は、言葉の形式が、意味の形成に依つて與へられた自他了解の性格を失ひ、従つて、各々の言語に屬する人と人との結合關係を失ひ、同時に、斯かる人間相互から承認さるべき、意味の性格を喪失することともなるであらう。われわれは先きに、一言語内部に於ける言語活動が、一方には對象への通路を拓く個別性としての個々の言葉と、他方には、人間相互を共同的に結ぶ特殊性としての文法とが、兩側面として、交互に媒介し合ふ働きに依つて、形成せられる點を規定した。概念から言葉への轉落が、人間の自他了解關係を失ふとは、斯くの如き、言語の特殊面としての文法的性格が遊離して、専ら、個々の言葉の對象的側面のみが殘留することを意味するであらう。而して、斯くの如く言語の外的文法から遊離した言葉の形式とは、他ならぬ、

單に意識の内的文法の側面に關はるものとしての言葉を、意味するであらう。しかも、内的文法とは又、意識が、對象を自己の内部に攝取する場合の形式に他ならず、斯くの如き形式を通して、事物に就いての表象が、始めて意識の内にその處を興へられるのであつた。

して見れば、今われわれの考察する、概念から轉落した言葉の形式とは、實は、内的文法の制約の下に轉落し來つた言葉に他ならず、別の言葉を以つて表現すれば、其れが、眞に對象に就いての、意識内の媒介作用を完了せるや否や、今一度、内的文法によつて檢證さるべき言葉に他ならぬ。扱て、意味の世界の成立は、對象に關して、其の表現と、事物そのものとの、二つの次元を措定するとは、前に規定せる處であつた。此處に事物そのものと呼ばれるものは、例へばテオドル・リットの場合の如く、觀念の領域、換言すれば、意味の領域の成立に依つて、其の外まに残留し其の外部に棄て去られる如きものであつてはならぬ。さうではなくて、寧しろ、人間の眼に映り、人間から見られてゐるに過ぎぬ事物、云ひ換へれば、單なる主觀化された事物が、人間の外に、言語の客觀的形態を興へられつつ表現として作り出され、斯く言語内部へその主觀性を攝取せられることに依つて洗ひ出された事物そのものが、新たに人間の内に現前するのである。此の現前のためにこそ、言語活動が、自己媒介的に、表現の次元と共に論理の次元を用意して、事物そのものの人間に現前し來たるべき形式となり通路となるのである。同時に、斯くの如き、事物そのものの現前し得るが如き通路と形式とを内に具へる人間は、眞に人間そのものを自己に具有する存在に他ならぬと云へるであらう。

従つて、意味の世界の成立とは、別言すれば、對他關係にある人間と、主觀化された事物と、表現的言語との三者

の形成に依つて、普遍性の領域を洗ひいだすことに他ならず、同時に、此の三者は、意味の世界の統一性を形成しつつ、其の作用を足掛りとして、自己が洗ひ出した普遍性の領域へ、自己の極限として、概念を媒介的に轉出せしめるのである。此のやうに、概念は、意味の次元にあつては、上述せる三者に展開し、普遍の領域に媒介されては、概念の個別的に轉出する。而して、斯くの如く、表現の次元と論理の次元とが、言葉から概念への轉化に依つて成立せしめられ、其れに依つて、人間の外部に、例へばカントの場合の如く、*Ding an sich* として絶縁され、殘留するが如き物自體の世界はなくなるのである。即ち、それとは逆に、事物の世界が、單に人間と並列せる外的關係の側面、換言すれば、人間の眼に映る限りに於いての事物としての性質をば、意味の成立に依つて洗ひ取られ、謂はば、事物の自己として、従つて、其れ自身の主體性を與へられ、其れ自身の働き出でる形式を具有する事物として、現前するのである。斯かる新たな性格があればこそ、事物が、人間の主體との間に、判斷活動の歸屬關係を成立せしめることが可能となるのである。論理の活動に於ける認識の成立が、單に人間の主觀的表白ではなくて、實に、事物そのもの内實を把握すると考へられるのは、上述の事態に依る。

併し乍ら、われわれが此の項に於いて、課題として考察する概念から言葉への轉落にあたつては、意味の領域が同時に喪失するのであるから、事物そのものの論理的領域も亦消滅して、事物は其の主體性を失ひ、改めて、主觀化され對象化されるに到るであらう。従つて、斯くの如き事物の主觀化的側面は、再び表現として言語活動の内に攝取せられざるを得ぬ事となり、而して斯かる攝取の完了とは又、對象に就いての内的文法の制約を、意識の外なる言語の世界へ、極限として媒介することに他ならぬ。此のやうな、媒介的極限こそ、フムボルトの考察に際して、われわれ

の規定した言葉の形式を意味するものであらう。而して、此の、言葉の形式は、内的行爲の媒介者として、精神の對象に向ふ努力 *Streben* の方向のみならず、對象が又、精神に向かつて與へる抵抗 (*Widerstand*) の側面をも媒介して、此れら兩側面の何れにも偏せざる、独自の、安定的領域を形成するのである。而して、斯かる安定せる形式は、一言語に屬する言葉の形式として、單なる裸形ではなくて、既に文法の側からの規定をも與へられて、特定の、働き得る、生きた言葉として定立される。此れが、われわれの云ふ言葉の形式に他ならず、フムボルトを出でて、特に此の性格を規定したのは、此の側面の定立なくしては、言語活動の媒介性が、見失はれるからである。従つて、フムボルトの有名な「言語そのものは、成果、即ち *Ergebnis* ではなくて、活動、即ち *Enstehen* である。」^{註1}といふ命題は、書き改められねばならぬ。エルゴンの側面を、正しく位置づけることなくしては、言語活動に於ける、眞の媒介の働きを、把握し難いと云はざるを得ぬ。

註(1) フムボルト、全集七卷、四六頁

言葉とは、上述の如く、意識の内的行爲に媒介されて、意識の領域から、言語の世界に轉出し來つた對象に他ならない。即ち、事物は先づ、表象として意識に取り入れられるのであり、斯かる意味に於いて、表象とは、内在化せる事物の謂ひであらう。而して、表象として内在化された事物は、更に、意識の領域から、言語の世界に轉出して、言葉として對象化される。此の研究の冒頭に擧げたフムボルトの、言語が對象化されて客觀的となる、と云ふ考へは、右の事態を指すものであらう。斯くの如くして、對象化された言葉は、既に、意識の領域を媒介して、其れを打ち超えつつ、言語の客觀的世界に、安定せる獨立の領域を形成する。言葉は、斯かるものとして、始めて、意識の外に在

るのであり、斯くの如き意識からの獨立は、其れが、意識内の二つの方向、即ち努力と抵抗とを媒介することに依つて、始めて可能とされる。努力は精神からの方向であり、抵抗は、事物からの方向であり、斯かる二重の方向を媒介せるものとして、實に、言葉は同様な二重の性格を有する。それと同時に對象も亦、人間に與へる抵抗と、人間の側からの努力との、二重の作用を俟つて、始めて、對象として定立される。即ち、單なる對象からの作用は、表象として、人間の意識に依つて内在化されるに過ぎず、人間精神は、斯くの如き、單なる外部の受容を超えて、其れを積極的に媒介して言葉を産出して、其處に客觀的な言語の領域を形成すると共に、又、事物の世界に、對象の領域を形づくる。其の意味で、謂ば意識の領域を中間として、言葉と對象とは分極し、而して、各々が、意識の內的行爲に固有の二方向を媒介するものとして、二重性を有する。^{註1}

此の二重性の、言葉に於ける構造は、一方に、言葉の言葉自身に對する關係、並びに他方には、言葉の對象に就いての關係と云ふ二重の構造となつて現はれる。云ひ換へれば、言葉は、其の形式を確立することに於いて、同時に對象に就いての、意味を形成する。此の場合、注意すべきことは、言葉の對象的關係が、意味として、換言すれば言語的表現として、リットの所謂觀念の世界をば客觀的に、従つて人間の外に、對象化する^{註2}と云ふ點である。と同時に、言葉の自己的關係は、即ち、言葉の形式として、従つて、概念を發生せしめ、其れに依つて論理の普遍的領域をば、人間に對して現前せしめると云ふ他の點が、注目すべきであらう。斯くの如く、言葉の對象的側面が、反つて表現の言語的領域を形成し、言葉の自己形式が、逆に事物そのものの領域を形成すると云ふ、表裏反轉の事態こそ、實に、媒介の働きのもつ一つの特徴を示すものに他ならぬ。

われわれは、先きに、概念から轉落した單なる言葉が、文法的側面から遊離せしめられて、言葉の形式を失ひ、改めて、内的文法に依る表象との檢證を必要とする點に論及した。併し乍ら、概念に於ける言葉の形式は、其れが言葉の性格を有すると云ふ點で、必ず、意識の内部に作用するけれども、しかも、既に、意味を形成し了へることに依つて、新たに概念と成り、従つて、言葉の形式を失つたのではなくて、反つて、言葉の形式をエルゴンとして確立したものであるから、斯かるものとして、其の意識への作用も亦、右の場合とは明かに異なる。即ち、單なる言葉の場合には、對象に就いての表象を喚び起し、其れに依つて、單なる形骸に墮せる言葉をば、改めて、對象の表現に依つて充して、生ける言葉に化せしめることが問題であつた。云ふ迄もなく、表象は、意識の内部に於ける知覺形式であらう。従つて、單なる言葉の場合に生ずる内的作用は、知覺作用に他ならず、われわれが前に規定した内的文法とは、單なる覺知形式の側面に關はるものであつた。併し乍ら、概念に於ける言葉の形式の場合には、知覺作用を媒介したへて、既に意味の形成を完了した普遍性のモメントとして、其の喚起する意識内の作用は、もはや、再び知覺作用たり得ぬ。即ち、斯くの如き、概念に於ける言葉の形式が喚起する意識内作用とは、他ならぬ、直觀の形式であり、斯かるものとして時間と空間との形式註3なのである。従つて、言語活動に於ける、言葉から概念への轉化、即ち、言葉の形式の回歸は、意識内活動に於いては、知覺から直觀への轉化となり、斯かる轉化を關したものである。意識の回歸なのである。斯はる迄もなく、表象は行爲の形式ではない。其れが、時間・空間といふ行爲一般の形式たる直觀に轉化することに依つて、意識作用は、始めて内的行爲と呼び得るものに化するであらう。斯くの如く、意識も亦、二重の構造註4を有するものであり、意味の形成を完了せる概念が、唯、單に普遍の領域を、處を問はずに形成するのでは

なくて、其れは直観として、必ず、人間の意識内に普遍の世界を現前せしめるのである。しかも、此の注目すべき事態こそ、概念にとつて必然的なる、言葉の形式といふ性格に據るものに他ならぬ。

われわれは、意識の二重性をさしはさんで、表現と対象とが表裏反轉しつつ、事物と人間そのものとの、普遍の領域を形成する事態に論及した。即ち、知覚作用は、表象を形成すると云ふ意味に於いては、決して、單なる消極性に終るものではない。併し乍ら、其の積極性とは、カント以來「対象から觸發せられる仕方によつて、表象を受けとる能力、即ち受容性 [Receptivität]^{註6}」であり、云ひ換へれば、内在化の能力に他ならぬ。而して、斯くの如き、知覚作用に依る事物の内在化は、未だ、表現以前の意識活動として、対象と表現との表裏反轉を招來する媒介の次元に到達せず、従つて、人間と意識と事物との、並列的關係に過ぎぬ。併し乍ら、此のやうな表象を足掛りとする表現の場合には、當然、意識の領域を出でて、精神の世界に移らねばならぬ。即ち、表象は、特定の言語に屬する言葉として、従つて、其の言語に固有なる文法の制約を豫想しつつ、意識の領域から、精神の世界へ表出されねばならぬ。而して單なる内在的表象としてではなくて、表出された言葉として、其處に、始めて、其の言語に屬する人と人とを、自他了解的に結合するに到る。併し乍ら、斯くの如き、人と人との結合は、其れらの表象が、同一であると云ふ理由に依つて、成立するものではない。表象は、本來内在的なものとして、其れを取り出して、同一性を檢證すべき方法がなく、其の内在性を打ち超えて、外に表出すれば、勞ひ、言葉と成るより手だてはあるまい。此のやうな言葉は、事物が、内的行爲の媒介に依つて、対象として外に轉出したものであり、斯くの如き、対象に就いての、自他の共有關係こそ、始めて、人と人とを、共有を基礎として、相互に承認せしめるものなのである。

表象の領域は、「意識の内に閉ぢ籠められた」ものとして、例へば、ヘーゲルの道徳意識の如く、未だ無言 noch stumm であり、未だ現實存在でなく noch nicht Dasein、「現實存在と自己とが、僅かに、互ひに外的關係に置かれてあるに過ぎない。併し乍ら、言葉が其れらの中間者として現はれ、……現實存在に於ける多様性の、單一なる承認存在 einfaches Anerkantssein となる。」^{註1}勿論、ヘーゲルの「精神現象學」に於ける立場は、前にも指摘せる如く、事物の側面の媒介を完了せざるものとして、例へば、此處に云ふ現實存在 Dasein の概念も、専ら、人間精神の現象的様相を示すものに他ならず、従つて、其れは、人間の自我承認の側面から捉へられた存在として、飽く迄も、主觀化された事物、即ち單なる對象化された事物に他ならぬ。従つて、無言の、孤獨 einsame なる、自己の内にあるものが、言表 das Aussprechen に依つて集團 eine Gemeinde の領域に移ることは、言語表現の自我了解による共同性に於て、當然のことではあるが、斯くして形成された對象的現實存在 gegenständliches Dasein が、普遍者 ein Allgemeines の規定をうけることは、容されまい。^{註2}斯くの如き、媒介作用の主觀性は、ヘーゲルの全體系をも性格づけるものと考へられるのであるが、其れは兎も角も、言表に依つて、意識内に於ける無言なるものが、人間相互の承認の領域に移される點は、否定すべくもない。

斯くの如く、表象は、意識内に無言なるものとして、其れ自身としては、個々並存する多様性を、形づくるものとして考へられる。併し乍ら、一度、其れが言表せられるや、表象は、人間相互の意識内に分極し、斯かる分極を支へとすることに依つて、始めて、言葉の單一に於ける、人と人との結合が可能とせられる。斯くの如く、言葉の單一性に於いて、人間は、同一なる事物に就いての表象を分有するのであり、斯かる表象の分有による言語表現に於いて事物は

對象と呼ばれるものとなる。従つて、言語表現を俟つて、始めて對象の定立が可能である如く、實は、言表に依る人間相互の結合に於いて、始めて、表象は、意識の内部に、處を得ると考へられよう。而して、斯くの如く、言語の共同性を媒介とせる言葉は、他ならぬ、文法の制約を媒介とせる、意味的表現の言葉であり、斯かるものとしての言葉からの作用に依つて、表象は、意識内に處を得るのである。此のやうな、意味的表現の言葉から知覺的意識に與へる作用が、直觀の意味する處に他ならず、知覺に於ける表象の多は、上述の如き直觀からの反作用に媒介されて、他の意識に表象を分極せしめ、其れに依つて、一人の意識を、他の意識に結び付けつつ、自己の在るべき處をうる。斯くの如く、知覺を意味に媒介して、再び意識に回歸したものが、他ならぬ、直觀であり、逆に、言葉を直觀に媒介して再び、言語の領域に立戻つたものが、表現或ひは意味の世界であり、斯かる領域は、他の言葉を以つて現はせば、現象の世界に他ならぬ。即ち、其れは、一方に於いては直觀に相關する領域として、又他方、既に表現の獨立せる領域を與へられた對象として、従つて、單なる假象としてではなく、實に、現象として、獨自の世界を形成する。斯くの如き現象の領域をば、特に意識の側面に即して考察するものが、フツセルの現象學であり、従つて、其處では、意味と表現との意識現象が、主題をなすであらう。而して、又、斯かる現象の領域をば、専ら精神の側面に即して考察するものが、ヘーゲルの精神現象學であらう。従つて、此處では、意識の精神現象が主題をなす。此のことに依つても明かな如く、現象とは意識の内と外との媒介であり、斯かる意識内外の媒介とは、又、一方に、言葉の形成をさしはさむ意識と精神との媒介であり、他方には、言葉の形成をさしはさむ、意識と意識との、表象分極に依る媒介を意味する。此のやうな二重の媒介に依つて、始めて、事物は精神の領域に轉化せしめられ、しかも、斯くの如き言語活動

としての表現が、表裏反轉して反つて對象と化するものであり、此のやうな、對象の領域を名付けてわれわれは現象と呼ぶのである。

註① 併し乍ら、斯かる言葉と對象との二重的規定は、單に兩者の、同格なる並存を意味するものではない。其處では、必ずや、精神の側から事物へと云ふ一定の方向が存するのであつて、斯く精神の側から始め乍ら、しかも精神的形成としての言語が、表現として對象と成る處に、中間者としての凡ゆる言語の否定性があるのである。

註② 拙論、四節に引用したリットの文章中、Idell な意味の世界の成立を同時に „objektiviert” とも規定してある。

註③ 拙論、六節参照

註④ 例へばフツセルの、意味概念の二重性も亦、此處に述べた事象の、現象學的表现と考へられる。即ち、フツセルは、ノエマと知覚ノエシスとの定立に依つて、知覚をも含めた意味での、廣義の意味 Sinn と、言語的且つ論理的な本來の意味 Bedeutung との、二つを規定してゐる。云ふ迄もなく、志向性としての意識の二重構造に據るものでもあらう。vgl. Ideen zu einer reinen Phänomenologie, 1922. S. 256ff.

註⑤ Kant; Kritik der reinen Vernunft, B. 33.

註⑥ Henri Poincaré; La Valeur de la Science, p. 263.

註⑦⑧ ヘーゲル「精神現象學」前掲版、四五八、四六〇頁。勿論、此の個處に於いては、斯かる allgemeines も亦、 Einzelheit との矛盾の分裂を惹き起して、所謂 schone Seele として否定せられるのではあるが、併し、媒介の主観性と云ふ缺陷は、主著「論理學」にも蔽ひ難く、やがて、ヘーゲル左派の系統からの、媒介の物質性と云ふ反對を將來するものと考へられる。

六 意味の構造 二

意味の共同性、並びに其の種的性格に就いて

知覚の内外並存に就いてフツセルに關説す

われわれが、上述に於いて考察した、知覚と直観との相互媒介による、表象の定位、換言すれば、言葉の表出に依つて媒介される意識の二重構造と、斯かる二重構造に媒介されて、單一なる言葉に於いて、自他了解的に結合する二つの意識への、表象の分極といふ事態は、媒介の論理に於いて、特別の意義を有するものと考へられる。即ち、表象の分極とは、分極せる表象を足掛りとして、自他の意識が、外的な並存関係をば、言語的表現の共同性の内に融合せしめて、其處に、獨立なる表現と意味との世界を、形成せしめると云ふ意味なのである。従つて、斯くの如くして成立した意味の世界は、第一に、意識の外に、言語として表現されることに依つて、表象をば、其の在るべき場所、即ち、意識の内に定位せしめる。此れが、内的行爲の媒介であり、同時に、表象の定位である。而して、第二に、表象の定位とは、既に言語の共同性からの媒介、即ち、直観の媒介に依つて成立したものであり、斯くの如き二重の媒介に依つて、自己と他との内外並存せる表象が、其の並存関係を打ち超えて、實に、意味的統一を現はす言葉の二つの分岐として、自他の意識の内に、分極するのである。換言すれば、意味の世界は、一方に於いては、其れが對象の世界といふ獨立の領域を形づくることに依つて、意識の内に媒介する。此れが、表象の定位の意味する處である。と同時に意味の世界は、その言語的共同性に依つて、自他の並存関係をも媒介する。此れが、表象の分極の意味する處である。しかも、表象の定位と分極とは、屢、説く如く、意味の成立に於ける、同一作用の兩側面に他ならぬ。即ち、表象の定位と分極となくしては、言葉は、其の支へを失つて、意識の外に表現せられることが、不可能となるであらう。と同時に、意識の外の獨立なる、言語的意味の世界が無いたらば、表象は、單一なる多様として定位を失ひ、従つて、自他の表象は、單一なる個々の並存關係に終るであらう。斯くの如き構造こそ、言語的表現としての、意味の媒介

性に他ならない。

従つて、意味の共同性とは、實は、自他の並存關係をば、意味の統一性に媒介するものに他ならず、而して、斯か
る意味の統一性に依つて、自他の並存が消滅すると同時に、其れらの個々を打ち超えたる、統一的意味の世界が成立
し、斯くて、我と他との別なく、其の言語的表現に於ける精神活動が、各々の屬する民族精神の活動そのものを現は
し得ることとなるのである。而して、斯くの如き、意味の世界に於ける我は、既に、他との並存關係を媒介して、民
族の共同性の上に立つ我として、始めて、普通の領域をも望見しうる高みに立つ我と成る。上述の如く、意味の共同
性なくしては、決して自他の並存を打ち超えたる、意味の統一的地盤は成立せず、而して、此のやうな共同性は、又
表象の定位と分極と無くしてはその成立も、不可能となるであらう。即ち、表象の分極と定位とは、人間の自他並存
關係をば、歴史的共同性に轉ずる支點に他ならず、而して、斯かる共同性は、言語的表現と意味とに媒介されて、自
他の意識に、分極せる表象をその支へとして定位せしめることに依つて、始めて、可能となる。従つて、意味の共同
性こそ、自他の單なる外的並存を歴史的共同性に昂めるものに他ならず、同時に、自他の表象の内外並存は、必ず意
味の共同性に依つて、統一されざるを得ぬ。此の統一の様相こそ、われわれが、媒介の論理の一つの特色として、此
處に擧げた表象の定位、並びに、表象の分極に他ならぬ。

斯くの如き、意味の共同性を見失つて、其れをば、單なる傳達作用 *Kommunikative Funktion* として、従つて、
人間の並存關係、並びに、表象の内外並存と考へた一つの例として、例へば、フツセルを擧げ得るであらう。フツセ
ルに依れば、斯くの如き意味に於ける傳達作用は、意味作用ではなくて、單なる表示作用 *Kindgebung* に他なら

す、而して、斯かる表示作用が、他の意識に與へ得るものは、又、單なる外的知覺 *äußere Wahrnehmung* に他ならない。即ちフツセルは、表現作用を「表現自身と、表現が意味として *als seine Bedeutung* (als seinen Sinn) 表現するもの」^{註1}との、二つに分類し、而して、斯くの如く、意味から分離された表示作用を以つて、概念に依る認識とか、或ひは判断作用とは別個に、唯だ、話し手を直觀的に、一人の人格として *anschaulich als eine Person* 受けとるものに過ぎぬと、規定してゐる。此れが、フツセルの外的知覺に他ならず、同時に、斯かる外的知覺は、意味とは別個の單なる「直觀的ではあるが、妥當ならざる表象に基く、存在の假想的把握」^{註2}と、規定されてゐる。而して、斯くの如き外的知覺は又、フツセルに依れば、内的な其れが體験的であるのに對して、「眞理一般の何ら關はるところ無き想像的存在 *supponiertes Sein*」に過ぎぬと考へられてゐる。

上述の如き、表現の傳達作用は、表現の單なる物理的側面 *physische Seite* ^{註3}と、記號 *Zeichen*、或ひは標示 *Anzeichen* に過ぎぬものであるが、其れに對して、表現をば意味の方向に導き *auf den Sinn hinführen*、斯くして、體験の内的統一たる意味の指示 *Hinweisen* となるものは、他ならぬ、孤立せる心的生活の表現作用 *die Ausdrücke im einsamen Seelenleben* なのである。此の後者こそ、フツセルに依れば、本來、意味に關はるものであり、從つて、現象學の主題たる志向性の作用に屬するものであらう、以上の如き、標示と指示、内的知覺と外的知覺との聯關は、フツセルに於いては、並存 *miteinander*、又は並行 *Korrelation* の域を脱することなく、「言葉の作用(或ひは、恐らく直觀的な言葉の表象)は、われわれの、意味賦與の作用 *sinnverleihender Akt* を惹起せしめるもの

他ならぬ」^{註4}と述べる場合にも、その意味する處は、同一性の立場を超えること遠からず、何らか「單なる對象的事

態としては、記述し難き「溶解的統一 eine innig verschmolzene Einheit」と規定せられてゐる。

勿論、フツセルの後の考察に於いて、其の研究にとって主題をなす意味志向の作用が、直觀的志向 die intuitive Intentionen と、指標的志向 die signitive Intentionen との二つに分類せられる個所に到つても、^{註5}意味の統一性に於ける、上述の如き非媒介性は消失すべくもない。即ち、把握せられた對象が、直觀的志向に關係する場合には、それは直觀的表示態 intuitive Repräsentation と呼ばれて、對象の把握形式 Auffassungsform たる質料と、^{註6}内的な必然的聯關を形成する。換言すれば、直觀的表示態に於いては、意味志向と意味充實とが、内的、必然的聯關によつて、統一を形成すると考へられるであらう。其れに反して、指標的志向の場合には、把握形式と表示態とは、偶然なる外的關係 ohne zufällige, aussenliche Beziehung に置かれるのであり、その理由は、フツセルに依れば「同じ指標 Signifikation が、各、の任意の内容に、單に同一性に於いて identisch 附隨すると考へられるから。」である^{註7}と云ふ。云ふ迄もなく、指標作用とは、フツセル自身の規定に従へば、言語的表現を其のうちに含むものであり、従つて、右の如き考察に依れば、言語的表現の媒介作用は、何ら獨立的統一の地盤を與へられてゐない。否、それ處か、フツセルは、指標作用に於いて、意味を現はす記號が、「意味にとつて全く無關心である。」と述べて、言葉と記號との差異は云ふ迄もなく、況や、言語表現の共同的統一作用に關して、些かの考慮をも向けてゐない。勿論、斯くの如きフツセルの立場は、其の據る、現象學の方法から、必然的に由來するものと云ふべく、従つて、斯かる非媒介的見地は又、ノエシス・ノエシス並行論 ein Parallelsinn zwischen Noesis und Noema にも及ぶのである。^{註8}

註(1) Husserl: Logische Untersuchungen, II. Band, I. S. 77. 尚、此の項の引用は凡つ上掲書三二頁以下

註② 前掲書、三四頁。尙、假想的 *vermeintliche* と云ふ用語を、フツセルは、此處では意味又は志向性と別の、寧ろ、其れらに對立するものとして、使用してゐるのであるが、斯かる規定は、必ずしも嚴密に守られてゐないやうに思はれる。二九頁の *vermeintlichen Gegenständen, vermeintlicher (intentionaler) Gegenstand* (脚註) 三四六頁の六行目、三五七頁の五行目の *vermeintliche Ungrenzung, Was es vermeint ist*、等は、稍々志向性の意味に。又三四九、三五〇頁等のは、其れとは反對の意味に使用せられてゐる。フツセルに於いては、前に指摘したフムホルトの場合の如く、頗る異つた様相に於いてではあるが、用語の規定が一方的であるために、名詞形のものには形容詞を形容詞形のものには名詞を、附加することに依つて、た易く、正反對の意味を表現する機会が多い。同一性の立場を、嚴密に推しつめる場合に、當然生ずる例と云へるであらう。

註③ 前掲書、三一頁。フツセルも亦、フムホルトと均しく、表現をば、心的と物理的との二側面に分ち、その中間者としての、歴史的媒介者を考慮してゐない。ヘーゲルに於いて、其の點は、不充分であるとは云へ、正しく取り上げられてゐる。此の點への考察なくしては、言語も、又論理も、歴史的媒介性を見失ひ、單なる自然的な、個と普遍との對立に移るであらう。

註④ 前掲書、四〇頁、尙、此の項の引用は凡て、三五頁から四〇頁にかけて、

註⑤ Husserl: *Logische Untersuchungen*, II. Band, II. S. 53 ff.

註⑥ 前掲書、九四頁に、*Auffassungsform* とは別に *Auffassungsmaterie* と云ふ用語がある。但し、此處に擧げられた資料の意味は、「對象を單に指標的にか、或ひは直觀的に表象するか」の場合として、前者にあたるものと考へられる。

註⑦ 前掲書、六〇頁、六一頁其の他、

註⑧ 前掲書、九二頁、尙、此の項の引用は凡て、五三頁から、九六頁にかけて、

註⑨ Husserl: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie*, 1922. S. 207.

われわれは、上述に於いて、フツセルに關説し乍ら、意味の構造に存する共同性と、單なる自他並存の關係とを、考察して來た。前者に於いては、意識の外に表現される言葉と、對象を表象の定位と分極に依つて意識内に攝り入れ

る作用とが、相互に、内外二重の媒介を経つつ、其處に、新らたなる意味の共同性の世界が成立するのであつた。而して、言語的意味の世界の獨立性は、既に、自他の並存關係をば、其の内に融入せしめつつ、其れを打ち超えたる共同性、換言すれば、歴史的、種的領域を形成するものであつた。従つて、其處には、一方に於いて、フツセルの説く如き、意味表現と其の標示と云ふが如き並存はなく、同時に、意味の種的共同性をば、單なる集團の自他並存によつて代置せしめる思想もない。

勿論、フツセルに於いても、意味志向の内容を興へる、意味賦與的、心的作用 *sinngebender psychischer Akt*^{註1}、或ひは、表現の内容を興へるものとしての、意味賦與的表象 *sinngebende Vorstellung*^{註2} を考察する個所。更には、斯くの如き意味に於ける表象をば、作用性質に對して、作用質料 *Aktmaterie* と規定して、其處から、意味志向を基底づける作用としての表象 *die Vorstellung als funktioneller Akt* を、定立する個所^{註3}。續いて、フレンタノの命題に論及しつづ、凡ての作用をば、一方に於いて知覚の如き一肢的 *eingliedriges*^{註4}、即ち、單なる表象に依るものと、他方、一つ乃至多數の表象に基底づけられた、判断の如き作用との、二つに分類して、「凡ての作用は表象自身であるか、又は、一つ乃至は多數の表象に基底づけられたものであるか、である。」と云ふ規定を定立する個所。或ひは、上述の如き、基底づける作用としての表象をば「後に表示態 *Repräsentation* と名付けて」^{註6}其處から、指標作用の外的なるに對して、内的統一を形成するものとしての、直觀的志向を規定する個所^{註7}。又は、感性的知覚の單純なる *schlichte*^{註8}統一に對して、^{註10}連續的、多肢的綜合 *kontinuierliche, gegliederte Synthese*^{註9}による、^{註11}範疇的作用 *Kategorische Akte* を興げる個所。或ひは又、ノエシス・ノエマの定立と、意味の二重性を規定する個所。其の他に於い

て、精緻なる分析によつて、單なる並存ではなくて、必然なる内的統一への試みが、行はれてゐる點は、周知の如くである。同時に、斯くの如き努力と並行して、フツセルに於ける、表現作用の二つの側面、即ち、意味と其の標示との兩作用が、單なる組合せ Verflechtung^{註13}から、溶解 Verschmelzung^{註13}乃至は溶接 Angeschmolzene^{註14}に及び、次第に、緊密なる統一に接近するのを、見るであらう。即ち、意味は言葉に「依つて」、durch die Worte 形成せられ、「言葉は、指標的志向 signitive Intentionen を荷ひ、其れは、意味と、意味に依つて思考されたものを、往き來せせる überzuleiten と心の橋として als Brücke 作用する。」^{註15}斯くの如く、言葉は、表現を産出する溶解作用 die den „Ausdruck“ erzeugende Verschmelzung の役割を果し、而つて、表現と意味とは、「言葉の傍らに、外的に存在するのではなくて、われわれが、次第に會話を續行してゆく内に、言葉に溶接し、同時に言葉に生命を與へる、一つの内的思考となつて現はれる。」^{註16}のである。

併しながら、われわれは、フツセルの思想に於いて、たとひ其の分析が何れ程精緻であらうとも、又、並行し、錯雜した諸種の概念が提案されようとも、意味作用の、眞の媒介性が確認されてゐるとは、考へられない。即ち、意味作用の領域は、何よりも先づ、孤立せる心的生活に於ける表現であり、しかも、其の際に、意味作用の傳達的側面は、副次的な標示作用と共に、單なる並存關係のままに、外部に、置き去られてゐる。其處に於いては、傳達的作用が、單なる人間の並存關係を現はしてゐると均しく、孤立せる心的生活と傳達性とが、従つて又、意味と標示とが、單なる並存關係の見地に依つて規定されてゐるに過ぎぬ。此の事は又、既述に於いても指摘せる如く、當然、内的知覺と外的知覺との並存關係を導き出すであらう。事實、現象學の立場に於いては、フツセル自身述べる如く、内、外

の兩知覚は「決して一致するものではなく *Koinzidenz*……*durchaus nicht*」^{註17}、斯くの如き内外兩知覚の並存が、更には、知覚と統覚 *Apperzeption* との並存となり、直観と現象との並存となるのも、見易い道理と云はねばならぬ。^{註18}

上述の如き、知覚作用の内外並存は、單にフツセルのみならず、例へば、外的直観としての空間を抽象して、時間の内的直観を據り處とした^{註19}、カントの先驗哲學を想起せしめるものがある。勿論、兩者の學說史的關聯は別として、超越者の現象化、即ち、意識内への先驗化を志したフツセルが、反つて、超越者と意識との並存を物語る、内外兩知覚の並存に立ち到つた如く、時間の内的直観を重點としたカントが、其れの上に、經驗をば先驗的に確立せしめ得るものとして樹立した諸規定に依つて、反つて、物自體の懷疑論に道を拓いたことを、想起せしめると云へぬであらうか。斯くの如き立場に對して、媒介の論理は、一方には、事物に就いての知覚の多様と、他方、其れをば、表象の定位、並びに分極に導くところの、表現の側からの直観作用との、内外に互る、意識の二重構造を擧げるのである。而して、斯くの如き媒介の見地に於いては、先づ、表象が、フツセルの場合の如く、内外兩知覚の並存に於いてではなくて、知覚と直観との、媒介的統一者として把握される。知覚の内外並存は、同時に、意識と對象との並存と相關するものであり、従つて、斯かる見地に於いては、兩つの知覚の内、一つをば外的なるものとして抽象し、斯くして、抽象化に依つて定立された内的知覚を、對象との同一性の見地に於いて、範疇の基礎とするのが常である。従つて、斯かる見地に於いては、フツセルが適例を示す如く、現實性は、所謂先驗化の名に依つて、單に内在化の方向に求められて、對象と言語的表現とは、漠然たる一般者の位置に貶しめられるに到るのである。現象學に於いて、表現作

用が全く歴史性を喪失せしめられて、フムボルトに於ける如き、言語表現の特殊性が、見失はれてゐるのも、右の如き理由に依るものであらう。又、シヨウペンハウエルの傾向を批判しつつ「知覚されたる外的事物は、決して、感覺の複合ではない。其れは、寧しろ、現象に就いての對象である。」^{註20}と述べ、或ひは又、「事物の現象は、感覺の如く、單に意識の内に在る vorhanden のではなくて、寧しろ現象的性質 *erscheinende Eigenschaft* として、意識の内に、單に呈示 *dargestellt* され、又は、先驗的に構想 *transzendent vorfindet* されるものである。」^{註21}と云ふ時にも、其れは慥かに、對象との單なる類型 *analog* を立場とする心理主義に對しては、強力な、批判となるであらう。併し乍ら、現象學も亦、フツセル自らの語る如く、^{註22}類型の立場を眞に超えるものではなくて、寧しろ、心理主義の内外並存をば、意識内部そのものに於ける内外並存と化した、謂はば、内在的類型の見地に過ぎぬであらう。斯くの如くして、現象學も亦、言語表現と共に、對象をも、單なる類型の、無媒介的一般者となすこと、前に指摘せる如くである。

上述に於いて、われわれは、知覺作用に於ける内外並存の立場は、又、カント的、時間・空間並存の立場にも通じ、従つて、ハイデッガーが特に強調する、カントの時間的、直觀主義の立場を想起せしめる如く、フツセルに於いても、内的なる直觀こそ、「凡ゆる原理中の原理」^{註24}と、規定せられてゐる。共に、空間性と外的なるものを抽象し、而して、斯かる抽象を基礎とすることに依つて、其處に形成せられる先驗性をば、反つて、懷疑主義と内在主義とに導くものと、評し得るであらう。其れに對して、媒介の見地に於いては、言語的表現が、表裏反轉の作用に依つて、反つて、客觀的なる對象の領域を定立するのであるから、表現を形成する處の、内的行爲としての直觀の時間性は、必ず、表象の定位と云ふ、空間性の媒介を必要とする。即ち、定位された表象は意識に受容せられた事物として、同

時に又、表現を支へる媒介的分枝として、表現の客觀性を形成する媒介者となる。斯くの如く、表象の定位は、言語の領域からする直觀の媒介に俟つて、始めて可能とせられるのであり、直觀の內的行爲に基く表現は又、表象の定位が、自他の意識に分極せしめる、其れの分枝を足掛りとしつつ、始めて、獨立せる意味の領域、換言すれば、自他を超えたる、種的なる、人間の共同的地盤を、形成するものと考へられる。しかも、更らに、斯くの如き表現と意味との共同性は、進んで人間と事物そのものとの領域を、媒介的に切り拓くものであつた。即ち、主、客の一致は、必ず表現の媒介を必要とし、而して、斯くの如き意味に於ける表現作用は、必ず又、意識の時間、空間的、二重構造の媒介に依つて、形成せしめられる。

われわれが右に規定した意識の二重構造とは、既に説明せる如く、事物と精神との兩側面をば、對象と表現と云ふ二つの極限として、必然的に、意識作用の兩極に有つと云ふ意味で、謂はば、意識の内外に亘る媒介作用であつた。而して、對象と表現とは、斯かる意識作用に媒介せられるや、現象として一と化することも、所謂、對象と表現との表裏反轉として、既に論じてきた、此處に、表現と現象との、密接不可分の關係が存するのであり、言語表現としての記述 *Beschreibung* と、意味表現としての解釋 *Interpretation* とが、特に、現象の地盤を據り所とする學派の、重んずる處となるのも、斯かる理由によるものであらう。勿論、媒介の立場は、斯かる對象と表現との、單なる相關的同一性を退けること、屢説せる如くである。即ち、媒介の立場は、對象と表現とが、それらの他の次元たる、事物と論理との領域を、媒介し出すことに於いて、反つて、現象の客觀的世界を形成するのであり、しかも、斯くの如き現象の成立こそ、實に、單なる知覺の内外並存、更らに、直觀と表象との並存、時間性と空間性との、意識内に於ける並存、或ひは、自他の並存的聯關を打ち超えたる、意味の、種的、共同性に依つて、可能とせられるものに他ならぬ。(未完)

- 註(1)(2) フツセル、「論理研究」第二卷一、四六頁四七頁
- 註(3)(5) 前掲書、四五六、四六一頁
- 註(4) フンメンタノ命題に於ては、心的現象 Psychische Phänomene であり、*dass sie entweder Vorstellungen sind oder auf Vorstellungen als ihrer Grundlage beruhen.* (vgl. z. w. ebendas. S. 379) と規定して居る。
- 註(6) 前掲書、四五七頁
- 註(7) フツセル、「論理研究」第二卷二、五三頁、或ひは、九〇頁から九六頁にかけて、
- 註(8)(10) 前掲書、一四七頁以下、及び一五二頁以下
- 註(9) フツセル、「純粹現象學の理念」二四六頁
- 註(11) 前掲書、二五六頁以下
- 註(12) 「論理研究」第二卷一、二四頁三七頁其他
- 註(13) 前掲書、三八、三九頁其他
- 註(14)(15)(16) Husserl: Formale und transzendente Logik. (Fahrbuch für Philosophie X.) S. 20.
- 註(17)(18) フツセル「論理研究」第二卷二、二二三頁、尙、この項は二二三頁以下
- 註(19) Kant: Kritik der reinen Vernunft. B. 36, 50.
- 註(20)(21) フツセル、前掲書、二三四、二三五頁
- 註(22) フツセルは、その appearinge Eigenschaften od. Gegenstände von Erscheinungen であり…… in einem eigenen Sinne analog……, vgl. ebendas. S. 235.) と説明して居る。
- 註(23) M. Heidegger: Kant und das Problem der Metaphysik, 1929. S. 19, 20 ff.
- 註(24) フツセル「純粹現象學の理念」四三頁